

「一流になりなさい。それには、一流だと思込むことだ」という本からです

逃げては駄目だ。必ず追いかけてくる。

その頃の全社研修会で、毎回船井先生は同じ言葉で会を閉めていました。まるで予定調和のようで、その言葉が始まると思わず頬が緩んだものでした。「ミクロで見ると、多々問題はあったが、マクロで見れば、とてもよい一年でした」

これが、最初のとめの言葉です。そして、「みなさんの成長を見て、未来への確信をもてた一年でした」そう続きます。最後に、こう締めくくり、研修会は終わります。「すべてみなさんのお陰です。ありがとう。来年は素晴らしい一年になります」

ある意味、船井幸雄先生が、最も大変だった頃なのではないかと思います。あるとき、上場して数年が経ったときに聞いたことがありました。あの大変なとき、上場なんか止めてしまえ！と思わなかったのですか？そう聞いたのです。

少し笑いながら、船井先生はきっぱり言い切りました。「思わないよ。どんなことも、逃げては駄目だ。必ず追いかけてくるものだよ」あのとき、船井幸雄は単なる上場に挑んだのではありませんでした。「社員が 100 名を超えるころ、もし私に何かがあればと考えるようになった」そう船井先生は語っています。

船井先生は、企業をより永続させ得る形態へと、船井総研を変えつつあったのです。経営ということを考えたとき、その目的は永続にあると私は思っています。すべての努力は、企業永続のためにこそ、あるのです。船井先生が社にいらなくても、決して揺らぐことのない船井総研へ。船井幸雄、その人自身が、大きくその仕組みを変えるために、奮闘していました。

そんなときに、とても大切なことは、こんなことです。「船井幸雄の原点を決して失ってはいけないんだよ。船井会長の哲学の本質、原点を必ず受け継ぐことなんだ」取締役になり、船井先生が代表取締役から顧問へと退く前後、ただそのことを私は伝えていました。

原点は継承せよ。仕組みは革新せよ。そして品質は進化させよ。顧問先の後継者に、徹底して伝えることです。原点の継承。それは、企業が永続する絶対条件です。仕組みは、時代とともに変わります。その時々最善の仕組みへと革新します。

その目的はただ一つ。お客様への品質を、進化させるためです。ある意味、品質の絶えざる進化のために、創業者の原点を継承し、仕組みを革新させ続けるのです。船井先生は、仕組みの革新に挑んでいました。功成り名を遂げたトップは、時として自分の後に思いが至らないケースが多いものです。船井幸雄は違いました。いまにして思います。その変革のなかでも、私たちを勇気づけていたのだなと思うのです。一騎当千の経営コンサルタント集団を、上場という一番形式的で厳しい世界へと変換させる。

とても一筋縄ではいきませんでした。「マクロで見るとよい年でした。もちろんミクロで見れば、みんなも大変だったけど、いい方向にみんなの努力で行ってるぞ」そう伝える船井先生の姿を思いだすとき、リーダーの責任について思われます。未来への責任。

それが決して避けてはいけないリーダーの責任なのです。そこから逃げては、絶対にいけない。そう船井先生は、いつも言い聞かせていたのだと思うのです。

顧問先の後継者に、徹底して伝えてことはなんですか？

()